

アートを、 社会の中で誰もが 使える実践へ

歴史・学習・参加の権利から、
良い関わりと新しい仕事を育てる

「センス」で説明を止めず、
実践・判断・継承・事業をつなぐための構想

自分の考えを通すためだけでなく、
自分の考えをつくり直すために、形にする。

そこで生まれた問いを、事実と条件に照らして判断し、
その経験を次の人と仕事へ渡す。

リクエスト株式会社 | 組織行動科学®

2026年9月13日 公開最終版

本書は理念と実践設計の提案です。芸術一般の唯一の定義、
効果が確立した標準手法、すべての人への成果保証を示すものではありません。

最初に読む

本書の要点

アートを、特別な人だけのものにしない。その働きを「センス」で説明し終えない。専門家の知識と技能を尊重しながら、現実に触れ、形にし、応答を受け、自分の見方をつくり直す実践への参加をひらく。これが本書の出発点です。

目指すのは、気づきやアイデアの数を増やすことだけではありません。誰かの選択肢を広げ、次の関わりへ使える理解や手段を残すことです。さらに、他者も担える仕事やサービスへ育て、条件が整えば新しい業態や産業の形成へ接続する可能性を探ります。

本書の軸	大切にする区別
ひらく	参加の機会を広げることと、専門性・権利・対価を軽視することは違う。
具体化する	感覚や直観を排除せず、何を行い、どの応答から何を見直したかを残す。
つなぐ	芸術体験の価値、仕事への学習の転移、社会的・事業的な効果を分けて確かめる。
継続する	新しい案を生むことと、他者が担え、費用と責任を引き受けられる仕組みをつくることを分ける。

本書は、これまでのアート思考・判断デザイン・判断経験設計・「見えないAI 誤用」の公開資料を基礎に、歴史、権利、参加、学習、運営、評価の論点を接続したものです。既公表資料のデータ規模を、今回の方法の効果を検証した調査標本としては扱っていません。[\[30\]](#)
[\[31\]](#) [\[32\]](#) [\[33\]](#) [\[34\]](#)

本書は、社会に参加の機会をひらく理念を示しつつ、まず企業・行政・非営利組織などの仕事と協働で使う実践を中心に扱います。芸術一般を業務改善の手段だけに限定するものではありません。

読む目的に合わせて使う

理念と歴史は第Ⅰ～Ⅲ部、始め方は第Ⅳ部、職場への定着は第Ⅴ部、事業化と検証は第Ⅵ～Ⅷ部へ。付録B～Eの記録様式と、付録Fの通しの記入例を、一仕事に合わせて使えます。

**「誰でも再現可能」は、同じ成果の保証ではなく、
参加・実施・過程の確認・条件に応じた再使用を可能にする設計目標です。**

導入の例 | 第17章の仮想例を、先に読む

何を直すかの前に、 何を残したいのかを確かめる

方法を理解するための仮想例です。実在の顧客、観察記録、事業成果を示すものではありません。

家具の修理を頼まれたとき、「傷を消して元に戻すこと」がよい仕事だと考えたとします。しかし、説明だけでは、依頼者が何を残したいのかが十分には分かりません。

一つの場面で行うこと	そこから見えてくること
最初の見方を残す	「傷を目立たなくし、元の状態へ戻す」と捉えていたことを記録する。
未確定なまま形にする	傷を隠す見本、残す見本、用途を変える模型をつくり、違いを見比べられるようにする。
応答から捉え直す	仮に「この傷には家族の記憶がある」と聞けたなら、何を消すかだけでなく、何を残して使いたいかを確かめる。
条件を確かめて判断する	本人の希望だけで施工を決めず、安全性、技能、費用、説明の負担、修理後の責任を確認する。

ここで変わり得るのは、修理の方法だけではありません。「不具合を取り除く仕事」から、「何を残し、何を变えて使い続けるかを、本人が選べるようにする仕事」へと、仕事の見方も捉え直されます。

**形にする。応答を受ける。見方・問い・価値仮説を見直す。
そして、事実と条件を確かめ、判断と次の経験へつなぐ。**

すべての人に記憶や参加を求める例ではありません。「早く確実に直してほしい」という選択も尊重します。第17章で仕事・事業への接続を、付録Fで記録の残し方を扱います。

本文の見出し・参照資料へ移動できます

目次と読み方

導入の例 一つの仕事で、何を捉え直すのか	3
第 17 章の仮想例から、形・応答・判断の関係をつかむ	
第Ⅰ部 歴史から学ぶ方法と限界	5
1-2 章 生活・労働・教育・身体・素材との接続	
第Ⅱ部 参加・専門性・異議を尊重する	8
3-6 章 文化参加の権利、参加方法、学習、対立	
第Ⅲ部 参加を決定と責任へつなぐ	12
7-8 章 決定への影響、媒介する仕事	
第Ⅳ部 仕事で使うアート思考	14
9-11 章 定義、形・応答・描き直し、見分け方、判断への区切り	
第Ⅴ部 転移と再現性を設計する	19
12-13 章 次の仕事へつなぐ、他の人が使える条件を残す	
第Ⅵ部 継続できる仕事と事業へ	21
14-17 章 財源・対価・役割、業態・産業、家具修理の仮想例	
第Ⅶ部 成果と不利益を確かめる	25
18-20 章 社会的影響、AI、多様性、評価	
第Ⅷ部 更新できる実践の基盤	29
21 章 手引き・記録・支援・事例・検証	
結論／調査範囲・根拠の扱い	30
理念、適用限界、参照範囲と改訂方針	
付録 A 歴史上の接点をたどる	32
選択的な年表と、現在の実践へ持ち帰る問い	
付録 B～E 実務で使う記録様式	34
一仕事の記録、支援者確認、事業接続、検証計画	
付録 F 仮想例による通しの記入例	39
最初の形から、描き直し・判断・未確認・引継ぎまで	
参照資料・関連する当社の公開資料	42
34 件の資料／資料種別・参照範囲・原文へのリンク	

本文の〔数字〕は巻末の参照資料へ移動します。本文・要旨・公式説明など、参照した範囲を区別しています。仮想例と記入例は、実在の成果や効果検証を示すものではありません。

第I部 | 歴史から学ぶ方法と限界

1. 芸術の歴史を、 「一部の人から、すべての人へ」という一本道にしない

芸術と社会の関係を考える際には、表現や制作の営みと、現在の「美術」という制度や分類を区別する必要があります。近代に特定の美術制度が形成されたことは、それ以前に表現や制作がなかったことを意味しません。

日本の近代的な「美術」の形成も、既にあった絵画、彫刻、工芸等が、国家政策、教育、輸出、文化財保護などの中で位置づけ直された過程として研究されています。佐藤道信は、その異なる政策目的と制度形成の関係を論じています。[\[1\]](#)

本書では、西洋の制度を世界共通の到達点に置き、他の文化をその前段階として説明しません。また、歴史上の実践をすべて当社のアート思考の先駆として回収しません。つくり手、受け手、目的、制度の関係は、それぞれの時代と地域で異なります。

創造性を、一人の内部だけに探さない

浮世絵版画は、版元、絵師、彫師、摺師の専門性の組合せによって成立しました。構想、制作技術、企画、販売は、分業と協働の関係にありました。[\[2\]](#)

中世からルネサンス期のヨーロッパの画家の工房でも、親方、徒弟、助手が集まり、技術を学びながら制作していました。中国の文人絵画には、書や詩との結び付き、後の所有者等による応答の蓄積も見られます。ただし、文人の学習は教育や社会的地位にも支えられていました。[\[26\]](#) [\[27\]](#)

**表現が専門職以外にもひらかれていたことと、
誰もが平等に参加できたことは、同じではありません。**

歴史から受け継ぐのは、天才的な個人の物語だけではなく、学べる技術、道具、素材、支援者、制作を届ける仕組みです。同時に、誰が参加しにくかったか、誰の働きが見えにくかったかも確認します。

第Ⅰ部 | 第1章 続き

歴史上の実践から、 方法と、その成立条件を同時に学ぶ

実践	確認できる関係	本書で持ち帰る問い
アーツ・アンド・クラフツ運動	制作・労働・生活を問い、工房・教育・展示・販売を結び付けた。[3]	何をつくるかだけでなく、誰がどの条件でつくり、誰に届くか。
バウハウス	素材等の基礎教育と工房を組み合わせ、試作を量産へ接続した。女性の参加には偏りもあった。[4]	学べる方法と利用の仕組みを整え、理念と実際の参加の差をどう確かめるか。
山本鼎の自由画教育・農民美術	子どもの表現や農村の制作を、教育と暮らし・仕事へつないだ。[5]	専門家以外の人学び、つくり、継続できる条件は何か。
メンテナンス・アート	家事、清掃、都市の維持労働を芸術の問いとして扱った。[6]	新たに生む仕事だけでなく、維持・修復・引継ぎの価値と負担をどう見るか。

これらは、単一の運動が順に進歩した歴史ではありません。異なる問題を抱える実践が、ときに教育や産業へ接続し、ときに既存の社会や価値のあり方を問い直してきた歴史上の接点です。

歴史的な先例があることと、現在の方法が有効であることも別です。過去の理念を引用するだけで、現在の参加や効果を保証することはしません。

受け継ぐのは、生活・学習・協働へひらく方法。

併せて確かめるのは、参加の偏り、労働、費用、継続の条件です。

付録Aでは、ここで扱った実践と追加の接点を、選択的な年表として整理しています。世界の芸術史を網羅する通史や、実践間の直接的な影響関係の図ではありません。

第1部 | 歴史から学ぶ方法と限界

2. 「形にする」を、 図や文章をつくることだけに狭めない

仕事で使いやすくするために、アート思考を図解や言語化だけに置き換えると、音、身体、時間、素材、即興、沈黙などを通じて知る働きが抜けてしまいます。形とは、完成した画像だけではなく、見直したり、他者と確かめたりできる状態を含みます。

ポーリン・オリヴェロスの「Deep Listening」は、日常の音や環境、身体、想像力を含む聴く実践として展開されてきました。継承するセンターの説明でも、音楽の専門訓練を受けた人だけに対象を限定していません。[\[7\]](#)

また、Theatre of the Oppressed NYC のフォーラム・シアターでは、当事者の経験からつくられた場面に参加者が入り、別の行為を試します。その応答を通じて、個人の行動だけでなく社会や制度の問題も議論します。これは運営団体による実践の説明であり、普遍的な効果の証明ではありません。[\[8\]](#)

仕事で選べる「形」の例

方法	確かめられることの例
描く・書く・並べる	関係者、受渡し、前後の流れ、言い切れない部分、配置の違い。
演じる・動かす・使う	説明する側と受け取る側の違い、手が止まる箇所、身体や時間の制約。
聴く・触れる・試す	音、素材、場所、道具から返る違い。言葉だけでは捉えにくい扱いやすさや違和感。

何でも直ちに文章へ変換することを求めません。実物や途中の記録を使い、まだ説明できないものを残すこともできます。ただし、個人的な経験の開示や身体的な参加を強制しないことが前提です。

方法を行っただけで、アート思考が成立したとはしません。

どの応答から、見方・問い・価値仮説の何が見直されたかを確認めます。

第II部 | 参加・専門性・異議を尊重する

3. 文化への参加を、 「社会に役立つ人だけの資格」にしない

社会的な価値を目指すときほど、先に確認しておきたいことがあります。芸術に参加する機会を、仕事の成果や社会的貢献を証明できた人だけのものにしないことです。

世界人権宣言第 27 条は、文化生活へ自由に参加し、芸術を享受する権利と、創作者の精神的・物質的利益の保護を、同じ条文に置いています。参加と創作者の尊重は、どちらか一方を選ぶ関係ではありません。[\[9\]](#)

障害者権利条約第 30 条も、文化への平等な参加、利用しやすい形式でのアクセス、創造的・芸術的・知的な可能性を育てて活用する機会を重視しています。[\[10\]](#)

芸術の価値と、特定用途への効果を分ける

楽しむ、味わう、遊ぶ、表現する、鑑賞する、答えを出さずに向き合う。その経験自体も尊重します。本書は、すべての芸術活動へ業務上の成果指標を課す提案ではありません。

一方、企業や組織が「この実践で仕事の判断を改善する」と約束して導入するなら、その特定の目的に対して何が起きたかを確認します。その効果が確認できなかったことと、芸術経験そのものに価値がなかったことは、同じではありません。

区別するもの	本書の立場
文化に参加する機会	有用性の証明を参加資格にしない。専門家の権利と、参加者の選択を尊重する。
仕事の改善を目的に用いる方法	目的・対象・費用・期待する変化を明示し、実際の結果と限界を確かめる。

**アートを社会へひらくために、
すべての芸術を一つの用途や成果指標へ閉じ込めない。**

権利に関する資料は、本構想の原則を考える背景として参照しています。個別の法的義務や契約条件の判断を、この説明だけで行うことは想定していません。

第II部 | 参加・専門性・異議を尊重する

4. 「誰でも参加できる」は、 同じ方法を全員に求めることではない

参加の壁を、本人の能力や意欲だけの問題にしません。使える時間、言語、道具、情報、場所、感覚や身体の状態、集団で発言することへの負担を、実施の設計に含めます。

CASTの「学びのユニバーサルデザイン（UDL）」のガイドライン3.0は、参加、情報の受け取り方、行為・表現の方法に複数の選択肢を設けることを提案しています。選択と自律性、段階的な支援、異なる表現方法への偏りを扱うことも含まれます。教育設計の参照枠組みであり、本書の方法全体を検証したものではありません。[\[11\]](#)

設計する条件	具体化の例
表現の選択	描く、話す、並べる、指し示す、動かす、音を使うなどから選べる。
理解を支える準備	資料の事前共有、用語の説明、道具の使い方、具体例、必要な基礎知識を用意する。
参加の仕方	個別で考える、少人数で共有する、発言せずに記録するなどを認める。
公開と退出	個人の経験を開示しない、公開を断る、途中で止める、参加を見送る選択を守る。

支援が必要なことを、能力の低さと結び付けないようにします。一方、必要な知識や技術を何も教えずに、本人の自由な発想だけに任せる方法にもしません。

参加方法を変えた際には、実践の目的と、確かめる対象が保たれているかを確認します。例えば、描く代わりに模型を使っても、本人の現在の見方が外に出て、応答を受けて見直せるなら、その違いを認めます。

**同じことを全員にさせるのではなく、
必要な接点へ、それぞれがアクセスできる条件を整える。**

第II部 | 参加・専門性・異議を尊重する

5. 「センス」を否定せず、 学べる部分を取り出す

感覚、直観、熟練者の微細な判断を、すべて文章で説明できるとは限りません。しかし、それを理由に、観察、構想、表現、試行、比較、修正のすべてを、他者には学べないものとして扱う必要ありません。

ハーバード大学 Project Zero の「Eight Habits of Mind」は、制作を通じて学ぶ思考として、技術を身につけること、構想すること、表現すること、観察すること、省察すること、探索することなどを整理しています。芸術教育で扱う働きを明らかにする枠組みであり、職場のあらゆる能力への転移を保証するものではありません。 [\[12\]](#)

説明を止めず、手がかりを残す

本構想では、なぜできたかを完全に解明してから実践を始めるのではなく、他者が学べる手がかりを残します。何を見比べたか。どこで手を止めたか。何を試し、何を残し、何を变えたか。どの知識や技術が必要だったか。

言葉にしきれない場合には、途中の物、版の違う図、短い動作の記録、素材や配置の差を使います。説明できない部分を無理に説明したことにせず、追加で見せたり、一緒に行ったりできるようにします。

「センス」で止めた説明	学習につなぐ問い
何となく、こちらがよい。	何を見比べたとき、どの違いが気になったか。
慣れれば分かる。	どの経験が必要で、何に注意すると違いが見えるか。
この人だからできる。	どの知識・道具・役割分担・支援が、実践を支えていたか。

これは、偶然の発見や遊びをなくすための手順化ではありません。実施した行為の数だけを採点せず、予想外の方へ進んだときにも、その過程を学べるようにするためです。

感覚を排除しない。

しかし、「センスがあるから」で、学習の入口を閉じない。

第II部 | 参加・専門性・異議を尊重する

6. 「良い関わり」を、 合意や快適さと同一視しない

対話や協働を重視することと、対立が起きないことを成功条件にすることは違います。参加者が笑顔だったこと、提案への賛成が増えたことだけでは、異なる経験や利害が十分に扱われたかは分かりません。

グラント・ケスターの『Conversation Pieces』は、対話やコミュニティとの協働を通じる芸術実践を扱っています。一方、クレア・ビショップは「関係性の美学」を批判し、対立を含む民主主義の観点から芸術の関係性を問い直しました。本書では両者の議論を一つの理論へ統合せず、対話の価値と、関係の質を批判的に見る必要を考える参照とします。[\[13\]](#) [\[14\]](#)

本実践で守る条件

賛成しない人も、その場にいられる。問いや目的の設定自体に異議を述べられる。「参加したのだから賛成した」と扱われない。関係を維持するために、不利益を黙って引き受けなくてよい。これらを運用上の原則とします。

仕事や地域の問題を、当事者の「見方を変える訓練」だけで解決しようとしません。本人の理解が変わっても、権限、制度、予算、労働条件が変わらなければ扱えない問題は、構造の変更が必要な問題として残します。

対立が起きた場合は、誰の立場から何を大切にしているのか、どの事実が未確認なのか、何を交渉できるのかを分けます。安全な対話の範囲を超える場合には、進行を止め、必要な専門的支援や正式な相談経路へ移します。

良い関わりとは、同じ価値観にそろうことではありません。

違いを保ちながら、考え、選び、関われる余地を広げることを目指します。

ケスターは出版社の公開紹介・目次、ビショップは著者所属機関の公開要旨を参照しています。両書・論文の全議論を本書で再現したものではありません。

第III部 | 参加を決定と責任へつなぐ

7. 意見を聞くことと、 決定に影響できることは違う

参加者の人数や発言量だけでは、参加の実質は分かりません。意見を求められていても、何を変えられるかが分からず、採用されなかった理由も返されない状態では、協働の範囲が曖昧になります。

アーンスタインの「市民参加の梯子」は、計画やプログラムの決定に市民がどの程度の力を持つかという観点から参加を区別しました。米国の都市政策等を対象とする議論であり、全職場へそのまま適用する分類ではありませんが、参加の形式だけで判断しないための参照になります。 [\[15\]](#)

先に明らかにすること	確認する内容
何を問い直せるか	方法だけか。目的、成果の定義、役割分担まで見直せるか。変えられない条件は何か。
誰が参加するか	直接の利用者だけでなく、負担や影響を受ける人が含まれているか。
誰が決めるか	提案、採用、実行、停止について、誰がどの範囲の責任を持つか。
意見をどう扱うか	採用しない意見にも理由を返すか。異議や留保を記録できるか。
何を公開・再利用できるか	発言、作品、記録、個人情報の扱いについて合意しているか。

すべてを全員一致で決める必要はありません。専門的な安全判断や、法令・契約上の責任を持つ役割は維持します。必要なのは、決める権限があるかのように参加を求めながら、実際には何も変えられない状態にしないことです。

変えられない条件は先に伝える。

変える提案は、誰へ渡し、いつ回答するかまで決める。

第III部 | 参加を決定と責任へつなぐ

8. 専門家と当事者をつなぐ、 「媒介する仕事」を設ける

異なる人が集まれば、自然に協働が成立するとは考えません。現場の言葉、芸術実践の方法、技術上の条件、事業上の判断をつなぐ役割を、必要に応じて設けます。

市民による芸術の委託を扱う「New Patrons」の1990年のプロトコルは、市民、アーティスト、媒介者、資金提供者、研究者等の役割を区別しています。市民が必要とする理由を示し、アーティストが形を創出し、媒介者が適切な専門性との接続や協働を支える構造です。対立や緊張を交渉で扱うことも明示しています。[\[16\]](#)

媒介は、議論を滑らかにすることだけではない

本構想で提案する媒介者は、互いが何を前提にしているかを明らかにします。未完成のものを完成品の品質基準だけで評価しないようにし、声の大きい人の見方へ他の人をそろえないようにします。探索から採用判断へ移る際には、何を引き継ぐかを整理します。

機能	確認すること
理解の橋渡し	用語や経験の違いを、勝手に同じ意味へまとめていないか。
参加の調整	誰が話せていないか。別の参加方法や個別確認が必要か。
境界の確認	自由に試す範囲と、実際に変更する権限・責任が区別されているか。
引継ぎと応答	問い、仮説、反対意見、未確認事項が、判断する人へ届くか。

一人が複数の役割を担うことはできます。ただし、探索を支援する役割と最終判断を引き受ける役割の違いは、見えるようにします。

**媒介者が、正解を持つ新たな権威にならないようにする。
何を整理し、何を判断していないかを共有します。**

第IV部 | 仕事で使うアート思考

9. 芸術全体と、 当社の実務上の定義を分ける

本書では、芸術そのものの多様な価値、芸術実践から学べる働き、その一部を仕事へ接続する当社のアート思考という、三つを混同しません。観察、試作、対話、前提の見直しを、芸術だけの専有物として扱うこともしません。

当社の操作的定義

アート思考とは、既存の言葉や基準では捉え切れない現実を、未確定なまま形にし、その形と素材・他者・状況との往復によって、現実の見方、探究すべき問い、価値仮説をつくり直す思考実践である。 [\[30\]](#)

この定義は、あらゆる芸術の価値を判定する尺度ではありません。実践し、記録し、何が起きたかを検討するための当社の定義です。

本書で「アート思考」と呼ぶ実践の焦点

焦点は、既に決めた答えを上手に表すことだけでなく、つくった形や素材、身体、他者の応答から、何を問題とし、何を大切にすることも見直せることです。通常観察・試作・対話と重なる働きであり、方法の名称だけで成立を判定しません。

位置づけ	主に扱うこと
アート思考	未確定なものを形にし、応答を通じて、見方・問い・価値仮説をつくり直す。
判断デザイン	必要な情報、比較、条件、権限、責任、相談・停止、結果確認を整える。
判断経験設計	判断デザインを一仕事へ具体化し、本人の選択と結果を次に使える経験へつなぐ。

これらは、毎回同じ順番で通る三工程ではありません。既存の基準で判断できる仕事は、その基準を使います。結果を確かめたことで前提の不適合が見え、探索へ戻る場合もあります。[\[31\]](#) [\[33\]](#)

**自分の考えを通すためだけでなく、
自分の考えをつくり直すために、形にする。**

第IV部 | 実践前半：一つの場面から、形と応答へ

10. 独自の問いを、 実践の入場条件にしない

最初から強い問題意識や高度な表現技術を求めるのではなく、実際に关われる一つの場面から始めます。仕事が止まった場面だけでなく、うまくいった理由を説明できない場面、まだ言葉にできていない良さ、試してみたい可能性も対象にします。

当社の「深い関心と未来像の解像度」に関する資料も、関わり方を変え、応答の違いを確かめ、次の確認や問題設定へ戻す循環を、検証すべき実務仮説として提示しています。深い関心を本人の性格だけに置かない立場です。 [\[32\]](#)

一つの場面と、最初の見方を残す

実際の依頼、提案、会議、引継ぎ、相談等の一つを選び、依頼文や成果物、記録を手元に置きます。「私は何をする仕事だと捉えていたか」「何ができればよいと思っていたか」「何がまだ説明できないか」を仮に書きます。

これは、最初に正しい問題設定を完成させる作業ではありません。後から何を捉え直したかが分かるよう、出発点を残すための作業です。

未確定なまま、形にする

図、文章、配置、音、動作、模型、試作品など、対象に合う方法を選びます。不明なところを推測で埋めず、空白や「未確認」を残します。自分が感じた違和感も、観察した事実とは区別して表します。

形・他者・現実からの応答を受け取る

つくったものを見直し、使い、必要な相手や現場と確かめます。「これでよいですか」だけでなく、実際と違うところ、使うと止まるところ、表されていない大切なことを確かめます。

相手の言葉だけでなく、形のつながらなさ、予想と異なる使い方も手がかりにします。ただし、反応が変わっただけで原因や方法の正しさを確定しません。

必要なのは、深い問いを先に持つことではありません。

次に確かめたいことが生まれる接点をつくることです。

第IV部 | 第10章 続き：描き直しと判断への接続

最初の形と見比べ、 前提を描き直して判断へ渡す

最初の形と見比べ、描き直す

最初の図や試作を消さず、受け取った応答を踏まえてつくり直します。情報や表現を修正したことと、仕事の見方や問いが変わったことを区別します。

対象	確かめる問い
見方	この仕事や状況を、以前はどう見ていたか。今はどう捉えているか。
問い	以前は何を知ろうとしていたか。次に何を確かめる必要があるか。
価値仮説	以前は何を「よい」としていたか。今は誰の、どの状態を大切にしたいか。

価値仮説は、本人の願いや解釈を含む仮のものです。事実が分かれば、何を大切にするかが自動的に決まるとは扱いません。誰の便益・負担が含まれ、どの価値と両立しにくいかを明らかにします。[\[30\]](#) [\[31\]](#)

三つを無理にすべて変える必要はありません。確認の結果、維持したものも理由を残します。「見方が変わった」と報告するための活動にしません。

根拠と条件を確かめ、判断へつなぐ

新しい見方に合う事実だけでなく、別の説明や不利益も確認します。そのうえで、変更する、維持する、範囲を限って試す、追加確認するといった選択を行います。誰が実施し、どの条件で相談・停止し、何をもって結果を確認するかを定めます。

ここで判断デザインへ接続します。探索は、現実の条件を無視することではありません。未確定な案をすぐに完成品として採点しない一方、実際に採用するときの根拠と責任は明確にします。[\[31\]](#) [\[33\]](#)

**形をつくったこと、前提が変わったこと、
判断が変わったこと、結果がよかったことを、別々に確かめます。**

実践の記録は付録B、通しの記入例は付録Fに示します。記録がないだけで「考えていない」と判定せず、確認できないものは不明として扱います。

第IV部 | 第10章 補足：何が変わったかを見分ける

表現の修正・前提の見直し・維持と、 「現時点では不明」を分ける

以下は家具修理を題材にした四つの仮想例です。何が確認でき、何がまだ分からないかを区別します。能力の順位や、実践の可否を決める尺度ではありません。

記録上の区別	何をしたか／何が分かるか
表現・情報の修正	見本の写真を明るくし、説明を読みやすくした。伝え方の改善は分かるが、仕事の見方や「よさ」の基準まで見直したかは、この記録だけでは分からない。
前提を見直した	異なる仕上がりを見比べる中で、残したい傷と直したい箇所を分ける必要に気づいた。問いが「どう傷を消すか」から「何を残して使いたいか」へ変わった。 その変化につながった見本と応答を、具体的に残す。
確めたうえで維持した	選択肢を見比べ、本人が元の状態への復元を望むことと、専門担当が示す条件を確認した。問い直した範囲を示し、当初の方針を維持した。 維持した理由を残し、変化がないことだけで不成立とはしない。
現時点では不明	「新しい気づきがあった」とだけ記録され、出発点や応答が分からない。前提の変化は確認できない。一方、それだけで本人が考えなかったとも判定できない。

「変わった」という感想より、比較できる跡を残す

最初の形、受け取った応答、修正版または維持した理由を並べます。応答の言葉を言い換えただけか、仕事の対象・目的・大切にしている状態を再検討したかを確認できれば、不明のまま残します。

変化を強制しない。維持を失敗にしない。

不明を、能力不足の証拠にしない。

前提を見直したことと、採用した案が適切であること、結果が改善したことは別です。採用判断と結果確認は、第11章以降の条件に照らして行います。

第IV部 | 仕事で使うアート思考

11. 「いつ問い直すか」と 「どこで判断へ戻すか」も教える

すべての仕事を最初から問い直す必要はありません。必要な知識を知らないなら学び、基準が明確で適切なら使い、情報や権限が足りないなら条件を整えます。アート思考は、現在の見方や基準では捉え切れないことを扱うための選択肢です。 [\[31\]](#) [\[33\]](#)

いまの状態	先に検討すること
知識・手順が不足する	説明、教育、見本、実際の作業との対応づけを行う。
問題は明確だが、根拠が足りない	必要な資料・記録・相手・現場へアクセスし、事実と条件を確かめる。
基準が明確で、現実合っている	基準を用いて比較・判断し、実行と結果確認へ進む。
現在の問いや基準では捉え切れない	未確定なものを形にし、応答から見方・問い・価値仮説を見直す。

この整理は、仕事を排他的な四種類へ分類する尺度ではありません。途中で知識不足が分かれば学び、確認によって前提の不適合が見えれば探索へ戻ることができます。

自由に探索できる範囲と、変更権限を分ける

開始時には、守るべき安全・権利・情報管理等の条件と、見直してよい目的・方法・評価の前提を分けます。実際の仕事を変更する権限も維持します。

区切りでは、何が分かり、何が未確認で、次に誰がどの条件で判断するかを明らかにします。期限や資源に応じて保留することもできます。すべてが分かるまで決めないことを、一律には求めません。

**考えを自由に試すことと、
現実の仕事を無条件に変更することは別です。**

第Ⅴ部 | 転移と再現性を設計する

12. 体験と、次の仕事を 具体的ににつなぐ

芸術体験で気づきがあったことと、その後の仕事で判断や行動が変わったことは同じではありません。「仕事に生かしてください」と伝えるだけで、その間の接続を本人に任せないことが重要です。

OECD の『Art for Art’s Sake?』は、芸術教育から他領域への学習の転移について、一律の効果主張を避け、何がどの条件で移るかを区別する必要性を示しています。芸術教育の価値そのものを、他教科への効果だけに置く立場でもありません。 [\[17\]](#)

『How People Learn II』は、学んだことと現在の課題の関連性を明示することや、関連する問題を比較することが、新しい場面で知識を使うための支援になり得ると整理しています。

[\[18\]](#)

接続する段階	実際に行うことの案
行ったことを取り出す	観察した、仮に形にした、別の説明を残したなど、具体的な行為を確認する。
実際の仕事と対応づける	次の依頼、会議、提案、引継ぎのどこで、その行為を使えるかを決める。
一件で試す	必要な知識、情報、権限、相手への確認機会を整えて実施する。
異なる条件で使い直す	そのまま使える部分と、調整する部分を比較する。
支援と結果を確認する	どの支援があれば実施できたか。次に何を本人と組織へ残すかを決める。

この組合せは当社の実装案であり、全体の効果が既に実証されたという意味ではありません。最初から実際の仕事を題材にしても、別の仕事へ使えるようになったかは、別に確かめます。

**体験の理解、次の仕事での実施、
条件の異なる仕事への転移を、分けて設計します。**

第Ⅴ部 | 転移と再現性を設計する

13. 他の人が使える条件まで 残し、確かめる

実践の履歴を残すことは重要です。しかし、記録があれば他者も実施できるとは限りません。他者が実施できても、同じ効果が得られるとも限りません。

区別する段階	確かめること
経過をたどれる	何を行い、何が返り、何を見直したかが分かるか。
他者が実施できる	別の担当者や支援者が、必要な条件のもとで実践できるか。
別の場面で使える	仕事内容や参加者が変わっても、何を調整すれば使えるか。
効果の範囲を説明できる	どの条件でどの変化があり、どの場面では成立しなかったか。

同じ用紙、同じ質問、同じ時間配分を、必ずしも共通にする必要はありません。本実践では、見方を見直せる形を外へ出すこと、形・他者・現実の応答を受けること、前提の変化を確かめること、採用判断と結果確認へ接続することを、実装上の核として検討します。[\[30\]](#)
[\[31\]](#)

一方、表現媒体、道具、進行順序、時間、参加方法は、仕事と参加者に合わせて調整します。方法を変えたら、何を保ち、何を变えたかを残します。核そのものを変更する場合にも、別の版として区別します。

「誰でも」を、保証ではなく設計目標として扱う

特別な肩書や才能を入口にせず、学び、試せる条件を整えることを目指します。必要な専門性や支援の量には違いがあります。進めにくかった人を除外して成功率を示すのではなく、その人が参加するために何が必要だったかを改善材料にします。

再現性は、自由をなくすためではありません。

何が働き、何が働かなかったかを、他者と確かめるために高めます。

第VI部 | 継続できる仕事と事業へ

14. 価値を見つけることと、 継続する仕組みをつくることを分ける

一人の気づきが、相手へのよい関わりになる。その関わりを別の人も担えるようにする。継続に必要な技能、運営、対価や財源を整える。さらに、複数の組織や地域で使われるようにする。本構想は、その接続を目指します。

ただし、個人の変化から社会や産業の変化へ、自動的に広がるとは考えません。良い体験をつくれたことだけで、必要な人に継続して届く仕組みができたとは言えません。

利用者・受益者・費用負担者・提供者を分ける

立場	設計時の問い
利用する人	どの場面で何を使うか。参加や利用を自分で選べるか。
便益を受ける人	直接の利用者以外に、誰の仕事や状況が変わるか。
費用を負担する人	誰がどの価値に対して支払うか。支払えない人へどう届かせるか。
提供する人	必要な技能、責任、労働、設備、連携を誰が担うか。

これらの立場が同じとは限りません。企業内の改善で他部署が便益を受ける場合や、地域の共有資源として公的・共同的な財源が適する場合も、設計上の選択肢に含めます。

商業的な売上だけを唯一の継続手段にせず、企業内運営、公共サービス、非営利活動、協同的な運営なども検討します。どの形が適切かは、実際の必要性と責任、資源、利用の条件から判断します。

価値を感じてもらうことと、

必要な人へ届き、担い手が続けられることを、別に確かめます。

第Ⅵ部 | 継続できる仕事と事業へ

15. ひらかれた実践を、 権利・労働・対価から支える

利用者に無料でひらくことと、担い手が無償で働くことは別です。誰が費用と責任を引き受けるかを、実施前に明らかにします。

文化庁が2024年10月29日に公表したガイドラインの改訂案内は、適正な契約関係と、安心・安全な環境での持続可能な文化芸術活動を目的として示しています。本書はその目的を参照し、個別の契約や現行法令の適用判断を代替するものではありません。[\[19\]](#)

本構想でも、制作や実施だけでなく、準備、対話の調整、記録、参加への配慮、評価、片付け、保守、引継ぎを仕事として扱います。専門家や当事者の貢献を、無償の刺激や素材として消費しないことを原則にします。

合意する項目	確認する内容
範囲・役割・対価	何をどこまで行い、誰が何を担い、どの労働と費用を見積もるか。
公開・帰属・再利用	誰の貢献かを示すか。発言・作品・記録を、どの範囲で公開・改変できるか。
中止・終了・引継ぎ	途中で止める場合の対応、記録の扱い、設備や保守の責任をどうするか。

方法を共有する場合には、出所、利用できる範囲、改変の表示、公開できない記録を分けます。本書で全資料へ一律の利用許諾を設定するのではなく、公開物ごとに条件を明示する運用を提案します。

他者の文化を、一方的な素材にしない

オーストラリアのCreative WorkplacesによるICIPの実務資料は、先住民の文化的・知的財産について、必要な同意、適切な帰属、文化的価値の尊重を重視しています。本書では、他者の文化を一方的に用いないための参照とし、日本の法制度へそのまま適用するものとはしません。[\[20\]](#)

**ひらかれた実践であるほど、
権利、労働、対価、公開範囲を曖昧にしない。**

第VI部 | 継続できる仕事と事業へ

16. 新たな業態・産業への接続を、 段階ごとに確かめる

本書でいう業態は、商品名だけではなく、誰に何を、どのような関係・役割・運営で提供するかという事業のあり方です。アート思考によってその前提を見直す可能性はありますが、見方が変わっただけで新業態が成立したとはしません。

OECD・Eurostat の『Oslo Manual 2018』は、イノベーションを着想や発明と区別し、製品やプロセスが利用可能になる、または実際に使われることを定義に含めています。新しさと、成功や社会的な好影響も同一ではありません。[\[25\]](#)

検討する段階	確かめる内容
価値仮説	誰のどの場面に、見落としていた良さ、不利益、可能性があるか。
一つの仕事・サービス	何を提供し、誰が何を担うと、どのような変化が起きるか。
業態としての継続	技能、資源、協働先、責任、対価・財源、費用が結び付くか。
他者による展開	別の担い手も、品質と責任を保ちながら運用できるか。
産業形成の可能性	複数の担い手、継続需要、取引、専門人材、情報・評価の基盤が育つか。

この表は普遍的な産業発展の法則ではなく、構想の進み方を確認するための当社の提案です。一社にとって新しい事業が、社会にとって新しい産業とは限りません。名称を変えただけで、新たな価値が生まれたとも言えません。

好評でも担い手が疲弊していれば、持続可能な仕組みとは評価しません。条件が整わない場合には、範囲の縮小、運営形態の変更、継続しないことも判断に含めます。

**発想から産業創出へ飛躍して語らず、
その間に必要な仕事・資源・責任・需要を一つずつ確かめる。**

第Ⅵ部 | 方法を説明するための仮想例

17. 「家具を直す」から、 何を支える仕事なのかを見直す

以下は方法を説明するための仮想例です。実在する事業成果や、市場で初めての業態を示すものではありません。付録Fでは、この例を記録へ具体化します。

家具の修理を担当する人が、「傷を目立たなくし、元の状態へ戻すこと」をよい仕事だと考えていたとします。そこで、傷を隠す仕上がり、傷を残す仕上がり、用途を変える形を、素材見本や簡単な模型にして利用者と見比べます。

仮に、「この傷には家族の記憶がある」「全部を新しくしたいわけではない」という応答が得られたとします。このとき、捉え直すのは修理方法だけではありません。

対象	最初の捉え方	捉え直しの候補
見方	不具合を取り除く仕事。	何を残し、何を変えて使い続けたいかを、本人が選べるようにする仕事。
問い	どう元の状態へ戻すか。	何を大切にし、どの使い方や手入れを望んでいるか。
価値仮説	修理の仕上がりがよいこと。	安全性を保ちながら、本人が納得して使い続けられること。

ここでの核は、顧客の要望を聞いただけでなく、形にして見比べることで、つくり手も利用者も、最初には十分に言葉にできなかった価値へ触れたことです。

ただし、全員が記憶や参加を重視するとは限りません。「早く確実に直してほしい」「自分で手入れしたくない」という選択も尊重します。実際の提供には、安全性、技術、費用、説明の負担、修理後の責任を確認し、担い手の時間へ適切な対価が残るかを見ます。

別の事業者へ広げるなら、状態の記録、品質条件、技能教育、引継ぎ、取引の仕組みが必要です。それが実際に成立するかは、ここからの検証です。

**形と応答から価値を捉え直すことと、
その価値を継続できる仕事へ育てることを、分けてつなぐ。**

第Ⅶ部 | 成果と不利益を確かめる

18. 売上や参加者数だけで、 「社会がよくなった」としない

OECD の 2025 年の文化主導の地域再生に関する報告は、文化活動が地域のイメージや投資を変える可能性と同時に、不動産価格の上昇によって、元から住む人や文化の担い手が排除されるリスクを指摘しています。必然的な結果とするものではありませんが、便益と不利益を分けて見る必要を示しています。[21]

本構想でも、注目度、売上、来場者数、満足度だけを成果にしません。誰が参加でき、誰が参加できなかったか。選択肢は増えたか。負担は誰へ移ったか。担い手が続けられるかを、対象に応じて確かめます。

確認の視点	問いの例
参加と主体性	以前より発言・選択・相談・拒否ができるか。参加しない人も不利益を受けないか。
労働と負担	準備・維持・調整が特定の人へ偏っていないか。対価や支援は足りているか。
生活・環境への影響	利用しやすさ、場所、時間、材料、移動、廃棄などにどのような影響があるか。
継続と分配	誰が便益を受け、費用を負担するか。途中でやめる選択や引継ぎが可能か。

これらは、本書が提案する確認対象です。すべてを同じ指標で測るのではなく、影響の大きさと実践の規模に応じて決めます。提供する側だけで「よさ」を確定せず、異なる立場から結果を確かめます。

また、広く展開することが常によいとはしません。小さな地域や限られた関係の中で維持する方が適切な場合も、選択肢に残します。

**広がったかだけでなく、
何を保ちながら、誰のために広がったかを確かめる。**

第VII部 | 成果と不利益を確かめる

19. AI は、個々の出力と 集団全体の多様性を分けて見る

AI を使って形や案をつくることは、本実践に含めて構いません。一方、個々の成果物の評価が高まることと、集団として異なる可能性が広がることは、別に確認します。

Doshi と Hauser による 2024 年の短編小説のオンライン実験では、AI からアイデアを得られる条件で作品評価が高まる一方、AI 支援を受けた作品同士が似る傾向も報告されました。限定的な物語課題であり、すべての芸術、職場、現在の AI へ一般化することはできません。

[22]

この結果を背景に、本実践では、AI 利用の有無だけでなく、出発点となる経験や資料、表現方法、参加者の見方が一つにそろいすぎていないかも確かめることを提案します。

AI による補助の例	残す必要がある確認
メモや状況を図・文章にする	観察した事実と、AI が補った推測・創作を区別する。
別の見方・反対意見を提示する	生成した反応を、実際の当事者の声や現場の事実の代わりにしない。
複数案を比較・整理する	判断に必要な基準、条件、影響、採用理由を確かめる。
対話や結果を要約する	少数意見、説明しにくい感覚、未確認事項が消えていないかを照合する。

当社の「見えない AI 誤用」は、委任量ではなく、必要な問い直し、根拠の確認、判断、結果確認が確保されているかを見るための作業定義と初期仮説です。AI が案や問いを出すこと自体を誤用とはしていません。 [34]

**AI を使って形を広げながら、
現実との接点と、異なる人の見方を失わない。**

第VII部 | 評価の設計

20. 実施・前提の更新・社会的効果を分けて測る

芸術を用いたリーダー開発について、Sandberg の 2024 年の系統的レビュー・質的メタサマリーは 31 の実証研究を整理し、省察や対人関係等の変化が報告されていることを示しています。一方、証拠は個人の発達へ偏り、長期的・組織的な効果の検証には不足があるとしています。自己評価と他者評価の違い等も論点です。[\[23\]](#)

したがって、一人の気づきから組織全体の成果、さらに産業創出までを、一つの効果として扱いません。次の各段階を、異なる確認対象として設計します。

確認対象	主な確認方法の案
実施可能性	参加・中断・不参加、必要だった支援、実際の時間と費用を残す。
前提の生成・更新	最初の形、応答、修正版を比べ、何を見直したかを確認める。
仕事への転移	次の実際の仕事で何を行い、異なる条件でどう使い直したかを見る。
判断と行動	依頼、比較、選択、役割、実行内容の変化を確認する。
相手・組織への影響	本人の感想だけでなく、受け手・後工程の経験、便益、不利益を確認する。
継続・展開	他の担い手による実施、再利用、維持費用、必要な修正を確認する。

評価のための記録が、参加者を監視し、未完成な表現を能力不足の証拠として扱う道具にならないようにします。共有範囲、保存期間、匿名化の方針、結果を誰へ返すかを先に定めます。

参加したこと、気づいたこと、変えたこと、よくなったこと。
この間を飛ばさず、別々に確かめる。

第VII部 | 第20章 続き：因果関係と検証の進め方

比較・不利益・不明を残し、 方法自体を更新する

事前と事後に差があっても、それだけで方法の効果とは断定しません。仕事内容、参加者の経験、他の施策、支援者、評価方法、時間の経過など、別の説明も検討します。

可能な範囲で、通常対話や情報提供、既存の教育との比較、別の支援者による実施、一定期間後の確認を組み合わせます。対照条件を設ける場合も、安全や必要な教育を不当に奪わない設計にします。

Skivington らによる複雑な介入の開発・評価枠組みは、文脈、想定する働き、関係者、主要な不確実性、改善、経済的側面を各段階で扱うことを重視しています。保健医療等の介入研究の枠組みを、研究設計の参照に用いるものであり、本書の方法の効果を証明するものではありません。[\[24\]](#)

初期の実装で確認する順序

検討段階	優先して確かめること
方法の明確化	何を行い、何を变えないか。必要な支援・境界・記録は何か。
小規模な実施	理解可能性、参加しにくさ、実施負担、起きた変化と不利益は何か。
他者・別場面での確認	支援者や仕事が変わると、何が維持され、どこを調整する必要があるか。
効果・継続の検討	比較、継続観察、費用と便益を通じて、主張できる範囲を定める。

記録がないことだけで「本人は考えていなかった」と判定せず、確認できないものは不明として扱います。成功しなかった事例、従来の方法で十分だった事例、前提を維持する方が適切だった事例も、公開可能な範囲で残します。

**社会によいことを目指しているという理由で、
結果と限界の確認を省かない。**

第Ⅷ部 | 更新できる実践の基盤

21. 手引き・支援・記録・検証を一組にする

本構想を、誰もが使えるノウハウへ近づけるためには、一つの講座や一枚の手順書だけでなく、実践を支えるものを一組として整える必要があります。以下を、今後の実装の構成として提案します。

構成するもの	役割
実践手引き	使う場面と使わない場面、具体的な行為、判断へ移る条件を示す。
一仕事の記録	最初の形、応答、前提の変化、判断、結果を残す。既存の資料や実物も使う。
支援者用手引き	基礎知識の教え方、誘導しない問いかけ、参加方法の調整、対立や負担への対応を扱う。
過程が見える事例	完成品だけでなく、途中の迷い、修正、保留、失敗、引継ぎまで示す。
検証・改訂記録	何を根拠に方法を変えたか、何が不明か、どの版を使用したかを明らかにする。

教材数、参加者数、認定者数が増えることを、そのまま確立の証拠にはしません。別の人が使えるか。必要な条件が分かるか。結果を確かめられるか。誤りや限界に応じて方法を変えられるかを確認します。

共有する記録には、採用しなかった案や反対意見も含めます。何が未確認だったか、どの条件が変われば見直すかを残すことで、次の人が「過去の正解」を無条件に模倣しないようにします。

運用では、方法の所有者が唯一の評価者にならないよう、可能な範囲で別の支援者や評価者の確認を取り入れます。一方、評価基準を固定しすぎて新しい働きを見落とさないよう、基準自体も改訂の対象にします。

**共通化するのは、同じ答えではありません。
確かめ、学び、更新できる実践の条件です。**

結論 | 方法と、その方法を使える 社会条件の両方をひらく

アートを特別なものにしないとは、その豊かさや専門性を小さくすることではありません。
「自分には関係がない」とされてきた人にも、現実に触れ、形にし、応答を受け、自分の見
方をつくり直す機会をひらくことです。

アートを「センス」というブラックボックスにしないとは、感覚や直観を排除することでは
ありません。何に触れ、何を試し、どの応答を受け、何を見直したかを、他者も学べるよう
にすることです。

アートをアーティストだけのものにしないとは、専門家を不要にすることではありません。
異なる知識と経験を持つ人が、それぞれの権利、役割、専門性を尊重されながら、ともにつ
くれるようにすることです。

その実践を良い関わりへつなぐには、合意だけでなく異議を認め、誰の選択肢が広がり、誰
に負担が生じたかを確かめます。仕事や事業へつなぐには、実務で使う条件、担い手の対価、
継続する運営、他者が使える記録を整えます。

さらに新たな業態や産業へ育てるには、個別の成功を超え、複数の担い手、継続的な需要、
技能、責任、取引や共有の基盤を確かめる必要があります。どこまで進むかは、実際の必要
性と結果に照らして判断します。

アートだけですべてを解決しようとはしない。

しかし、特別な人だけのものとして、可能性を閉じることもしない。

**自分の考えを通すためだけでなく、自分の考えをつくり直すために、形にする。そこで生ま
れた問いを、事実と条件に照らして判断し、その経験を次の人と仕事へ渡す。**

良い関わりが巡り、必要な人へ届き、別の人も担える仕事へ育っていく。その条件を、実践
と検証によって整える。まずは仕事と組織の中で使える「ビジネスパーソンのためのアート
思考」として具体化し、社会の中で参加と実践の可能性をひらいていきます。

調査範囲と、根拠・提案の区別

何を参照したか

本書は、当社の既公表の定義・実務資料を基礎に、芸術と生活・教育・労働・参加・事業の
関係に関する歴史資料、文化参加の権利、参加型実践、学習の転移、組織開発、地域再生、AI
と創造性、評価方法を参照して編集した、選択的なレビューと実践提案です。世界の芸術史
を網羅する通史や、網羅的な系統的レビューではありません。

美術館・研究機関の解説、学術文献の本文または公開要旨、公的ガイドライン、出版社の紹
介、実践団体の公式説明を優先しました。日英の資料を中心とし、論点に直接関係する内容
を採用しています。検索語と採択基準を事前登録した調査ではなく、資料や地域・ジャンルの
選択に限界があります。

何を区別したか

根拠の種類	本書での扱い
歴史研究・所蔵機関の解説	過去の実践や制度を理解する資料。現在の方法の効果の証明にはしない。
学術研究	対象、方法、測定、限界の範囲で参照。別の仕事への自動的な一般化はしない。
条文・政策・指針	権利や設計原則の背景。個別事案への法的助言や現行要件の網羅ではない。
運営団体の実践紹介	役割や活動の設計を確認する資料。独立した効果検証とは区別する。
当社の定義・提案・仮想例	実践・記録・検証のための設計。実証済みの標準手法や実在の成果として示さない。

全文を確認していない文献は、公開された範囲を超える主張の根拠にしません。巻末に
参照範囲を記載します。参照した人物や機関が、当社の方法を承認・検証していることを意
味しません。

原版の資料確認基準日は2026年9月12日です。基礎資料と当社資料の参照範囲は同版を継承し、9月13日改訂
版で実践例・記入例を補足し、参照資料 [\[10\]](#) を外務省公開の条文本文に統一しました。本最終版では、実践の
見分け方、版表記、目次の案内、組版を整えています。新たな効果検証や、全資料の全文を同一基準で再分析し
たものではありません。

選択的な整理 | 進歩の階段や、直接の影響関係を示す年表ではありません

付録 A | 歴史上の接点をたどる ①

年代は、それぞれの運動・制度・活動を参照するための目安です。世界各地の芸術を網羅するものではなく、現在の実践へ持ち帰る問いを明らかにするための整理です。

時期・接点	参照した事実	現在へ持ち帰る問い
中世〜ルネサンス期 工房による制作	親方、徒弟、助手による学習と制作。 [26]	個人の才能だけでなく、学ぶ場・ 道具・役割がどう働くか。
中国の文人絵画 複数の時代にわたる	書・詩・絵画の学習や、後の人による 詩文等の応答。教養と社会的地位にも 支えられた。[27]	専門職以外の制作と、参加の実際 の条件をどう区別するか。
江戸時代 浮世絵版画	版元・絵師・彫師・摺師の専門性によ る制作と流通。[2]	誰の仕事が見え、誰の貢献が見え にくいのか。
19 世紀後半 アーツ・アンド・ク ラフツ	制作と生活・労働を問い、工房・教 育・販売等へ接続した。[3]	よい物をつくる理念と、つくる 人・利用者の条件は一致するか。
近代日本 「美術」の制度形成	近代の分類と制度が、教育・輸出・文 化財保護等の目的と関係した。[1]	何を価値ある制作と分類し、何を 見えなくしているか。

過去を「誰もが自由だった時代」と美化せず、
当時の参加・教育・資源・権力の条件も、合わせて読みます。

この年表の解釈欄は、原資料の結論の引用ではなく、本構想で検討する問いです。

教育・参加・生活・維持の接点

付録 A | 歴史上の接点をたどる ②

時期・接点	参照した事実	現在へ持ち帰る問い
1919～1933 年 バウハウス	基礎教育・工房・試作・産業を接続した。参加の偏りも存在した。 [4]	自由な探索と基礎教育、専門性と参加をどう両立するか。
1919 年以降 山本鼎の運動	自由画教育・農民美術を、教育と農村の暮らし・仕事へつないだ。 [5]	他者が学び、つくり、続けるために何を整えるか。
1925 年以降 民藝の運動	日常の器物や無名のつくり手へ価値を見いだす運動が展開した。 [29]	著名な作者だけでなく、つくり手と日常の用途をどう見るか。
1954～1972 年 具体美術協会	身体・素材・空間等を用いる実験的な活動。 [28]	完成した構想を表すだけでなく、行為と素材から何が返るか。
1969 年以降 メンテナンス・アート	維持労働を芸術の問いとして扱い、清掃労働者との活動へ展開した。 [6]	新しくつくる人と、維持し引き継ぐ人の価値をどう扱うか。
20 世紀後半～ 聴く・演じる・委託する実践	Deep Listening、フォーラム・シアター、New Patrons 等の異なる参加設計。 [7] [8] [16]	受け手が関わる方法と、決定・責任・専門家の役割をどう定めるか。

歴史上の接点は、当社のアート思考に含めるための分類ではありません。同じ言葉を使わなくても、生活へひらく方法や、参加を成立させる条件から学べます。

参照範囲：所蔵・運営機関の解説と公開資料。表の内容は選択的な概要であり、各運動の内部の相違や批判を網羅していません。

編集して使う記録様式 | 実施前から応答まで

付録 B | 一仕事の実践記録 ①

本様式は診断尺度ではありません。空欄は記入用です。すべて埋めることを目的とせず、不明・未確認・非該当を区別してください。

基本情報	記入欄
対象の一件／実施日	
参加者・役割／支援者	
共有範囲／保存先	
記録すること	問いと記入欄
入口と最初の見方	何をする仕事だと捉えていたか。何がよい状態だと思っていたか。何が気になっているか。
守る条件・必要な支援	安全、権利、情報管理、時間、試せる範囲、変更権限、参加方法をどうするか。
最初に形にしたもの	図・文章・動作・試作等の所在や版を残す。未確認部分はどこか。
受け取った応答	誰・何と確かめ、何が実際に起きたか。自分の感覚や解釈は別に記す。

個人情報や機密情報は必要最小限にし、公開用記録と実務上の原記録を区別します。最初の形を上書きせず、比較できる状態を残します。

編集して使う記録様式 | 描き直しから判断・結果へ

付録 B | 一仕事の実践記録 ②

対象	最初の捉え方	現在の捉え方・維持の理由
見方		
問い		
価値仮説		
記録すること	問いと記入欄	
変化の手がかり	どの形・応答が見直しにつながったか。まだ分からないことは何か。	
次の確認と判断	確認済み／仮説／未確認を分ける。変更・維持・限定試行・追加確認のどれを選び、誰が決めるか。	
実行条件と確認時点	担当、範囲、相談・停止条件、結果を確認する日・相手・記録を定める。	
結果・不利益・次への持越し	何が起きたか。予想との差、負担、維持・修正、別の仕事で確かめ直す条件は何か。	

前提の変化、判断の変化、仕事の成果は別々に記録します。良い結果が出ても、その理由を十分に確かめていなければ「理由は未確認」と残します。

能力の採点ではなく、実践できる条件を整えるために使います

付録 C | 支援者のための確認事項

場面	確かめること・対応の案
実施前	対象の一件、目的、試せる範囲、決める人、変えられない条件が共有されているか。
参加の調整	表現方法や時間に選択肢があるか。必要な知識・道具・補助は何か。辞退や公開拒否が不利益にならないか。
形にしているとき	不明なところを推測で埋めさせていないか。形の完成度だけで評価していないか。
応答を受けるとき	賛成を誘導せず、実際との違いを確かめているか。発言しにくい人や不参加者の影響を見落としていないか。
行き詰まったとき	必要な知識・情報・権限が不足していないか。媒体や関わる相手を変える必要はあるか。
描き直すとき	変化を強制していないか。前提の変更と、表現や情報量だけの変更を分けているか。
判断へ移るとき	根拠、未確認、影響、責任、試す範囲、停止条件、結果確認が具体化しているか。
実施後	参加者と受け手へ結果を返したか。不利益と負担、必要だった支援、次回の変更を残したか。

支援者の問いかけ

「どの事実と、ご自身の解釈が入っていますか」

「実際と違っているところを、誰や何と確かめられますか」

「何に触れて、最初の見方のどこを変えましたか」

「変えなかった部分には、どのような理由がありますか」

必要な知識は教える。問いの答えは誘導しない。

本人への要求と、仕事側で整える条件を分けて見る。

新しい見方を、継続できる提供の形へ移すための記録

付録 D | 仕事・業態への接続設計

新規性や市場性を判定する尺度ではありません。利用者・受益者・費用負担者・提供者を分け、実際の資料や確認相手を記載します。

検討すること	問いと記入欄
価値の対象	誰のどの場面に、何を変える価値があるか。確認済みの根拠と価値仮説は何か。
提供する仕事	何を提供し、何を提供しないか。利用する人と便益を受ける人は誰か。
担い手と専門性	誰がどの技能・道具・協働先を必要とするか。誰が判断・実行・結果確認を担うか。
対価・財源と総費用	誰が何に支払うか。準備、調整、参加への配慮、維持、評価、引継ぎまで含めて続けられるか。
品質・責任・権利	守る条件、公開範囲、帰属、事故・不具合時の対応、相談先は何か。
試す条件と次の判断	どこまで試し、何を確認するか。継続・修正・縮小・中止を誰がいつ判断するか。

他者による展開や産業形成を検討する場合は、複数の担い手による利用、継続需要、技能教育、取引、情報・評価基盤を別途確認します。

何を確かめ、どこまで主張できるかを残すために使います

付録 E | 検証・改訂の記録

項目	記入する内容
使用した版・実施条件	資料の版、対象の仕事、期間、参加者の経験、支援、AI や道具、並行する施策。
想定する働きと変化	どの実践から何が変わると見込むか。前提・判断・成果・転移を分ける。
比較と確認方法	何と比較するか。どの時点で、誰の記録・観察・説明を確かめるか。
実際に起きたこと	変化なし、中断、不参加、負担や不利益も残す。本人と他者の評価が違う場合は両方残す。
別の説明・未確認	経験、他施策、時間、対象の違いなどで説明できないか。不明なことは何か。
結論と改訂	今回主張できる範囲、維持・修正する点、次に確かめる条件、担当と見直し時点。

**「実施した」「変わった」「役立った」「他でも使えた」を混ぜない。
成功例だけでなく、方法を見直す材料も残す。**

付録 F | 仮想例による通しの記入例 ①

最初の形と、受け取った応答を残す

第 17 章を記録にした説明用の仮想例です。人物・発言・記録名はすべて構成上の設定で、実在の実施結果ではありません。付録 B の項目に対応します。

基本情報	記入例
対象の一件・時点	家具一脚の修理方針の検討。D0 を見本比較の日、D1 を追加確認の日とする。施工前の記録。
参加者・役割	利用者 A：希望と選択。担当 B：見本、記録、提案。技術責任者 C：実物の技術確認、提供可否の判断。
共有・保存	A・B・C の確認に必要な範囲で共有。記録は案件フォルダ F01 に保存。写真・発言の外部公開は別途本人と確認する。

付録 B① | 実施前から応答まで

記録すること	記入例
入口と最初の見方	傷を目立たなくし、元の状態へ戻す仕事だと捉えていた。仕上がりがよいことを重視していたが、本人が残したいものは未確認。
守る条件・支援	現物への加工はまだ行わない。見本の比較だけで安全性を判断しない。希望の開示や参加を求めすぎず、通常の修理を選ぶことも認める。
最初に形にしたもの	V1：①傷を隠す見本、②傷を残す見本、③用途を変える模型。並べた状態を記録。耐久性、工法、価格は未確認と付記。
受け取った応答	仮想設定の発言：A「この傷には家族の記憶がある」「全部を新しくしたいわけではない」。 B の解釈：傷が本人にとって価値を持つ可能性がある。ただし、他の傷や他の人にも当てはまるとは言えない。

事実に相当する発言記録と、担当者の解釈を分ける記入方法を示しています。ここに記載した発言自体は、実際の観察事実ではありません。

付録 F | 仮想例による通しの記入例 ②

前提を描き直し、
変更しない条件も明らかにする

前ページと同じ仮想例です。変化を報告するために、すべての項目を書き換える必要はありません。

対象	最初の捉え方	現在の捉え方
見方	不具合を取り除く仕事。	何を残し、何を变えて使い続けるかを、本人が選べるようにする仕事。
問い	どう元の状態へ戻すか。	どの傷や特徴を残したいか。どの使い方を続けたいか。何を確かめれば選べるか。
価値仮説	修理の仕上がりがよいこと。	安全性を保ち、本人が納得して使い続けられること。費用と担い手の負担も確認する。

付録 B② | 変化の手がかりと修正版

記録すること	記入例
変化の手がかり	V1 の見本と A の発言を見比べ、「傷は一律に取り除く対象」という B の前提に気づいた。本人が何を残したいかは、箇所ごとに確かめる必要がある。
修正版 V2	写真の上で「残したい箇所」「直したい箇所」「判断保留の箇所」を分ける。各案の内容、費用、維持の負担を比較する欄を用意する。未確認欄は埋めない。
維持する条件	安全性、技術品質、費用の説明、修理後の責任は維持する。外観の価値が見直されても、専門的な確認を省略しない。
採用しない案・保留	用途変更は、使用状況と技術条件が未確認のため保留。傷を残す案も、本人の発言だけでは採用しない。元に戻す案は、比較できる選択肢として残す。

更新したのは、すべての傷を同じ扱いにする前提。
安全性・技術品質・説明責任まで緩めたわけではありません。

付録 F | 仮想例による通しの記入例 ③

判断・結果・未確認を、 次の仕事へ引き継ぐ

前ページと同じ仮想例です。見本比較と提案修正までを行った設定とし、施工後の成果は未確認のまま記入します。

記録すること	記入例
次の確認と判断	BがAと残したい箇所を確認し、Cが現物と技術条件を確認する。費用・工法の確認前に施工を約束しない。今回の判断は「追加確認」とする。
担当・範囲・時点	D1までにBがV2へ質問と未確認事項を整理し、A・Cと確認する。技術的な提供可否はC、提示条件を受け入れるかはAが決め、Bが合意範囲を記録する。
相談・停止条件	安全性の判断がつかない、合意範囲を超える、費用や手入れの負担を説明できない場合は、施工へ進まず再確認する。必要な専門性が不足する場合は、適切な担当へつなぐ。
確認できた範囲	この仮想例では、見本の比較、Aの希望の一部の把握、Bの問いの修正、V2の作成まで。安全性・工法・総費用・施工後の満足や耐久性は未確認。
負担・別の説明	見本づくりと対話の時間が増える可能性がある。形の比較だけでなく、対話時間や担当者の支援が影響した可能性も残す。方法固有の効果とは断定しない。
結果確認と引継ぎ	施工した場合は、引渡し時と合意した使用後の時点で、本人の選択との一致、不具合、負担を確認する。V1・応答・V2・判断理由・未確認事項をF01に一組で残す。

付録 E へ渡す、今回主張できる範囲

この記入例が示すのは、最初の見方から、形、応答、描き直し、次の判断までを区別して記録する方法です。実際に仕事が改善したこと、他の担当者でも使えること、事業として続くことは示していません。

「見本を比較した」「見方を見直した」「成果が出た」を分ける。
未確認を残すことも、次の判断を支える記録になります。

原文へのリンク／参照範囲と限界

参照資料

各〔番号〕は本文の参照番号に対応します。年は公表・版・更新年です。参照範囲は原版（2026年9月12日）の記載を基本とし、本改訂で変更したものは個別に示します。参照元による本書の承認や効果検証を意味しません。

〔1〕 佐藤道信（2015）

「近代日本の『美術』と『美術史』」『現代美術學報』30。

参照範囲：学術誌公開ページ・要旨。

近代日本の美術概念と制度、教育・輸出・保護政策の関係。本文全体の議論を再現する引用ではない。

[原文・公表ページを開く](#)

〔2〕 The Metropolitan Museum of Art（2003）

Woodblock Prints in the Ukiyo-e Style.

参照範囲：美術館解説本文。

浮世絵版画の制作・企画・販売を支える分業と協働。

[原文・公表ページを開く](#)

〔3〕 Victoria and Albert Museum（2025年更新）

Arts and Crafts: an introduction.

参照範囲：美術館解説本文。

制作・労働・生活、工房や流通との接続。運動を機械の全面否定として扱わない。

[原文・公表ページを開く](#)

〔4〕 The Metropolitan Museum of Art

The Bauhaus, 1919–1933.

参照範囲：美術館解説本文。

基礎教育、工房、量産への展開、参加の偏りを含む歴史の概要。

[原文・公表ページを開く](#)

〔5〕 上田市立美術館／サントミュージゼ

「作家詳細：山本鼎」。

参照範囲：所蔵機関の作家解説。

1919年以降の自由画教育・農民美術運動と、教育・暮らしの接続。

[原文・公表ページを開く](#)

原文へのリンク／参照範囲と限界

参照資料（続き）

【6】 Queens Museum (2016)

Mierle Laderman Ukeles: Maintenance Art.

参照範囲：展覧会解説本文。

維持労働を扱う実践の歴史。現在の職場介入の効果を示す資料ではない。

[原文・公表ページを開く](#)

【7】 Center for Deep Listening, Rensselaer Polytechnic Institute

Deep Listening.

参照範囲：継承・運営機関の公式説明。

聴くこと、身体、環境、専門訓練のない参加者への入口。運営者による説明として扱う。

[原文・公表ページを開く](#)

【8】 Theatre of the Oppressed NYC

Our Work.

参照範囲：運営団体の公式説明。

当事者の経験を用いたフォーラム・シアターと、観客の介入。独立した効果検証とは区別。

[原文・公表ページを開く](#)

【9】 国際連合 (1948)

Universal Declaration of Human Rights, Article 27. 外務省公開版。

参照範囲：条文本文。

文化参加・芸術の享受と創作者の利益の保護。個別事案への法的助言ではない。

[原文・公表ページを開く](#)

【10】 国際連合 (2006)

「障害者の権利に関する条約」第 30 条。外務省公開日本語本文。

参照範囲：条文本文（第 30 条 1 項・2 項）。2026 年 9 月 13 日再確認。

文化への平等な参加、アクセス、創造的可能性を育てる機会。

[原文・公表ページを開く](#)

原文へのリンク／参照範囲と限界

参照資料（続き）

[11] CAST (2024)

Universal Design for Learning Guidelines, version 3.0.

参照範囲：ガイドライン公開本文。

参加、提示、行為・表現の選択肢と段階的支援。芸術介入の有効性を証明する資料ではない。

[原文・公表ページを開く](#)

[12] Project Zero, Harvard Graduate School of Education

Eight Habits of Mind.

参照範囲：研究機関の公開資料紹介。

Studio Thinking の制作に関わる思考習慣。職場への自動転移の根拠としては用いない。

[原文・公表ページを開く](#)

[13] Kester, G. H. (2013 年版)

Conversation Pieces: Community and Communication in Modern Art. University of California Press.

参照範囲：出版社の公開紹介・目次。

対話とコミュニティに関わる芸術の論点。書籍全体を通読した根拠とはしていない。

[原文・公表ページを開く](#)

[14] Bishop, C. (2004)

Antagonism and Relational Aesthetics. *October*, 110, 51–79. DOI: 10.1162/0162287042379810.

参照範囲：著者所属機関リポジトリの公開要旨。

関係性の美学に対する批判と、対立を含む民主主義の視点。全議論の再現ではない。

[原文・公表ページを開く](#)

[15] Arnstein, S. R. (1969)

A Ladder Of Citizen Participation. *Journal of the American Institute of Planners*, 35(4), 216–224. DOI: 10.1080/01944366908977225.

参照範囲：学術誌の公開要旨。

米国都市政策等における決定力と参加。全職場へそのまま適用する分類とはしない。

[原文・公表ページを開く](#)

原文へのリンク／参照範囲と限界

参照資料（続き）

[16] Hers, F. (1990) / Neue Auftraggeber

The New Patrons Protocol.

参照範囲：公開プロトコル本文。

市民・アーティスト・媒介者等の役割と、責任・交渉の設計。

[原文・公表ページを開く](#)

[17] Winner, E., Goldstein, T. R., & Vincent-Lancrin, S. (2013)

Art for Art's Sake?: The Impact of Arts Education. OECD Publishing. DOI: 10.1787/9789264180789-en.

参照範囲：公開本文の序文・要旨・関連総括節。

芸術教育の価値と、他領域への学習の転移に関する主張の区別。全章を同じ深度で解析したものではない。

[原文・公表ページを開く](#)

[18] National Academies of Sciences, Engineering, and Medicine (2018)

How People Learn II: Learners, Contexts, and Cultures. Chapter 5, Knowledge and Reasoning. DOI: 10.17226/24783.

参照範囲：第5章の知識統合・推論に関する公開部分。

既習知識の関連性の提示、関連する問題の比較と学習の転移。

[原文・公表ページを開く](#)

[19] 文化庁（2024年10月29日）

「文化芸術分野の適正な契約関係構築に向けたガイドライン（検討のまとめ）」改訂の公表。

参照範囲：公式改訂公表本文。

適正な契約関係と持続可能な活動の趣旨。現行法令の網羅的な解説や個別の契約助言ではない。

[原文・公表ページを開く](#)

[20] Creative Workplaces / Creative Australia

Respectful use and sharing of ICIP.

参照範囲：公式実務解説の関連箇所。

先住民の文化的・知的財産に関わる同意・帰属の説明を参照。日本法へ直接適用する指針とはしない。

[原文・公表ページを開く](#)

原文へのリンク／参照範囲と限界

参照資料（続き）

[21] OECD (2025)

The role of culture-led regeneration in place transformation.

参照範囲：公開報告書の Executive summary・関連箇所。

文化主導の地域再生の可能性と、排除・移転等のリスク。常に生じる結果とは扱わない。

[原文・公表ページを開く](#)

[22] Doshi, A. R., & Hauser, O. P. (2024)

Generative AI enhances individual creativity but reduces the collective diversity of novel content.

Science Advances, 10, eadn5290. DOI: 10.1126/sciadv.adn5290.

参照範囲：公開論文の要旨・関連本文。

短編小説のオンライン実験における個別評価と集団の類似性。現在の AI や全職種への一般化はしない。

[原文・公表ページを開く](#)

[23] Sandberg, B. (2024)

Outcomes of Art-Based Leadership Development: A Qualitative Metasummary. Behavioral Sciences, 14(8), 714. DOI: 10.3390/bs14080714.

参照範囲：公開論文の方法・結果・考察。

31 実証研究の整理と、個人中心・長期的組織効果等の限界。因果効果の統合推定とは区別。

[原文・公表ページを開く](#)

[24] Skivington, K., et al. (2021)

Framework for the development and evaluation of complex interventions: gap analysis, workshop and consultation-informed update. Health Technology Assessment, 25(57). DOI: 10.3310/hta25570.

参照範囲：著者所属機関リポジトリの公開要旨。

文脈、想定する働き、関係者、不確実性、改善、経済的側面を扱う評価設計。芸術実践への効果実証ではない。

[原文・公表ページを開く](#)

[25] OECD / Eurostat (2018)

Oslo Manual 2018: Guidelines for Collecting, Reporting and Using Data on Innovation, 4th edition. DOI: 10.1787/9789264304604-en.

参照範囲：公開本文の定義に関する箇所。

着想・発明と、利用可能または使用されたイノベーションの区別。業態・産業の五段階表は当社の提案。

[原文・公表ページを開く](#)

原文へのリンク／参照範囲と限界

参照資料（続き）

[26] The National Gallery

Workshop.

参照範囲：美術館用語解説本文。

中世・ルネサンス期の画家の工房、親方・徒弟・助手による学習と制作。

[原文・公表ページを開く](#)

[27] Hearn, M. K. / The Metropolitan Museum of Art (2008)

Chinese Painting.

参照範囲：美術館解説本文。

文人の書・詩・絵画、学習と社会的地位、作品への応答の蓄積。中国美術全体を一例へ還元しない。

[原文・公表ページを開く](#)

[28] 国立新美術館 (2012)

「具体」—ニッポンの前衛 18 年の軌跡。

参照範囲：展覧会公式解説。

1954～1972 年の具体美術協会の活動と、身体・素材・空間への実験。

[原文・公表ページを開く](#)

[29] 日本民藝館

「沿革」。

参照範囲：美術館公式沿革。

1925 年の「民藝」の命名と運動、日常の器物・無名のつくり手への関心。

[原文・公表ページを開く](#)

[30] リクエスト株式会社 (2026 年 9 月 2 日)

No.229 | 「アート思考」を「判断前提生成」として定義した図解 11 ページを公開。

参照範囲：発行者保存版・既公表本文。

本書の操作的定義の基礎。学術上の統一定義や有効性の確立とは区別。

[原文・公表ページを開く](#)

原文へのリンク／参照範囲と限界

参照資料（続き）

[31] リクエスト株式会社（2026 年 9 月 3 日）

No.230 | 「判断前提生成」の実装・検証を図解 13 ページで公開。

参照範囲：発行者保存版・既公表本文。

起動、探索、判断への接続、組織条件、評価に関する既公表の実務原則。

[原文・公表ページを開く](#)

[32] リクエスト株式会社（2026 年 9 月 2 日）

No.228 | 「深い関心」と「未来像の解像度」を仕事の中で育てる。

参照範囲：発行者保存資料・既公表本文。

関わりと応答から関心・問いが生まれる条件に関する実務仮説。

[原文・公表ページを開く](#)

[33] リクエスト株式会社（2026 年 9 月 10 日）

No.244 | 「考える力」はどう育てるのか。

参照範囲：発行者保存版・既公表本文。

必要な知識、現実の確認、判断経験と、各体系の関係。

[原文・公表ページを開く](#)

[34] リクエスト株式会社（2026 年 9 月 12 日）

No.245 | 「見えない AI 誤用」の作業定義と 4 つの構造仮説を公開。

参照範囲：発行者保存 PDF「見えない AI 誤用」11 ページ・既公表本文。

AI への委任と必要な機能の喪失を区別する作業定義。発生率や能力低下の実証ではない。

[原文・公表ページを開く](#)

発行・お問い合わせ

リクエスト株式会社 | 組織行動科学®

[公式サイト](#) | [お問い合わせ](#)

原版の資料確認基準日：2026 年 9 月 12 日。最終版発行日：2026 年 9 月 13 日。Web 資料は更新される場合があります。当社資料の記述は原版の参照範囲を継承しています。仮想例と記入例は方法の説明であり、実在の成果ではありません。

資料名：アートを、社会の中で誰もが使える実践へ

版：2026 年 9 月 13 日 公開最終版 / 種別：歴史・研究レビューに基づく実践提案